

オリンピックに関する諸史料の視覚情報化に関する研究

真田 久・阿部 生雄・大熊 廣明
近藤 良享・岡出 美則・長谷川悦示

Study on Visual-Information of the Historic Materials on the Olympic Games

SANADA Hisashi, ABE Ikuo, OHKUMA Hiroaki,
KONDO Yoshitaka, OKADE Yoshinori, HASEGAWA Etsuji

はじめに

本研究の目的は以下の通りである。

1. 日本におけるオリンピック運動の歴史について、オリンピック運動への参入に果たした東京高等師範学校の役割について明らかにする。

2. 日本におけるオリンピックに関する歴史的研究資料や、および筑波大学体育科学系の関係者の持っている写真やユニフォーム、メダルなどの諸史料の、効果的な視覚情報化をはかる。つまり、諸史・資料のデータベース化をはかり、映像権や肖像権に抵触しない範囲内で画像化・映像化し、オリンピック関連の研究資料として公開し、オリンピック競技大会やオリンピック・ムーブメントに興味のある人々に広く公開する。

研究の方法

目的1については、まず、東京高等師範学校の果たした役割について、長く校長を務めた嘉納治五郎や初の日本代表オリンピック選手、金栗四三という人物に焦点を当てて、オリンピックにかかわった経過や、それらの日本のオリンピック運動に与えた影響について、体育史やオリンピック史の諸史料から明らかにする、という手法をとることとした。特に、東京高等師範学校時代については、筑波大学中央図書館に設置されている「本学史料室」内に所蔵の史料や、1912年の第5回オリンピック競技大会(スウェーデン・ストックホルム)の報告書などを、主な史料として用いることとした。

目的2については、東京高等師範学校や、東京

教育大学、筑波大学関連者のオリンピックにおける活躍を、映像資料から集め、具体的な視覚的データベースとして集積する、という方法を用いることとした。その際に、体育専門学群の体育・スポーツ史料室運営委員会と連携して、その映像データベースを、当史料室において、公開することとした。また、それらオリンピック関連の諸史料を、史料室のホームページ上で公開することとした。

。東京高等師範学校のオリンピック運動に果たした役割について

1. 嘉納校長による学生スポーツの奨励

嘉納治五郎(1860～1938年)は講道館柔道の創設者としてのみならず、オリンピック運動を日本に導入した人物としても、功績を残している。ここでは、東京高等師範学校の校長嘉納が、オリンピック運動への日本の参加に積極的にかかわった理由について考察する。

嘉納は、1860年神戸市灘の酒造業の家に生まれた。開成学校を経て1881年、東京大学文学部を卒業。翌年、同大哲学科専科を卒業した。卒業と同時に講道館柔道を創設した。1882年に学習院講師、1885年に同教授に就任した。1891年、第五高等学校校長、第一高等学校校長を経て、1893年、高等師範学校校長に就任した。

嘉納治五郎の高等師範学校(1902年からは東京高等師範学校に校名変更)校長の在任期間は以下の期間で、合わせて四半世紀の長きに及ぶ。

第1期：1893年 9月～1897年 8月

第2期：1897年11月～1898年6月

第3期：1901年5月～1920年1月

そのため「嘉納といえば高師、高師といえば嘉納」といわれるぐらいに、嘉納は高等師範学校長としての業績を多く残したのであった。この校長の職にある期間に、アジア地域で初の国際オリンピック委員会（IOC）委員に就任し、1912年の第5回オリンピック競技会（ストックホルム）に日本選手団団長として参加したのであった。

嘉納は、講道館柔道を創設してその普及につとめるかたわら、高等師範学校長としても、スポーツ・教育の面で、様々な先駆的な試みを行った。それは、学生達のスポーツ活動を積極的に支援し、学生生活の中に定着させ、精神の修養と身体の鍛錬を通して、指導者としての人格の形成をはかったことであった。

1882（明治15）年に講道館柔道を創設した嘉納は、柔道の普及をはかりながら、より広く国民体育を振興することを目指していた。国民体育の観点から重視した運動は、柔道以外には、徒歩（長距離走）と水泳であったが、1993（明治26）年に高等師範学校長に就任すると、様々な学生スポーツが嘉納の後押しで盛んになり始めた。最初に設立された運動部は柔道部で、嘉納校長の誕生した翌1894年に設立され、嘉納自ら、しばしば直接指導した。

1896年に運動部を統括する運動会が高等師範学校に設立され、柔道部、撃剣銃槍部、弓技部、器械体操及び相撲部、ローンテニス部、フットボール部、ベースボール部、自転車部などが登録された。運動会の会長には校長が就く事が決められ、高等師範学校の学生は、そのうちの一部または数部に所属して、毎日30分以上の運動をすることが規定されたのであった。また、毎年数回の遠足会と1回の大運動会、臨時の水上大会（競漕）を行う事も規定されていた。大運動会は毎年秋に举行され、競走、サッカー、相撲、撃剣、綱引など20数種目が行われた。さらに1898年には、お茶の水から池上本願寺までを走る健脚競走が行われた。嘉納校長の登場により、高等師範学校の生徒は、皆、スポーツに参加するようになったのである。

1898年夏から数年、嘉納は校長職を外れていたが、校長職に復帰すると、嘉納はこれらの

スポーツ活動を、教員養成プログラムと連動させて実施することに着手した。1901年の遠足の折の嘉納の提唱により、新たに課外活動を束ねる組織として校友会（校長が会長）が設置された。嘉納は自らの柔道の経験を通して、身体を鍛えることは、勇気や忍耐力など精神の修養につながり、それが指導者としての人格の形成に役立つと考えていた。新たな校友会の運動部として、ボート部のほかに1902年に徒歩部（後の陸上競技部）と游泳部（水泳部）が加えられた。游泳部の活動は、水泳実習を実施することが主な活動であり、1905年には、千葉県館山の北条海岸における水泳実習（約2週間）が、新入生に義務付けられることになった。文科、理科、体操専修科を問わず、全員が水泳実習に参加し、合宿するのであった。水泳実習では、遠泳が主体であったが、何里泳げるかを競ったり、游泳大会を開催するなど、競技性を重視したのであった。

1908年、新入生は柔道と剣道のいずれかを選択必修することが決められた。同時に、この年から徒歩競走（長距離競走）が春夏に行われるようになった。徒歩競走は全校生徒が参加する行事であった。

柔剣道を履修し、長距離走大会に出場し、そして夏には水泳実習に参加する、というのが嘉納校長時代の東京高等師範学校の学生なのであった。嘉納がいかにこれらに力を注いだかは、游泳実習の例にもうかがわれる。これも嘉納の発案で1902年に始められた実習であるが、彼はほとんど毎年、船の便もあまり良くない中、館山まで自ら出かけて実習生を励ましていたし、水泳の寄宿舎の建設にも奔走したのであった。学生達の実習参加費は学校の経費で賄うことにもした。

競技形式を取り入れて、精神の修養をも視野に入れた学生スポーツを奨励したのが嘉納校長であった。この時代の東京高等師範学校は、欧米の高等教育機関に勝るとも劣らぬ程、スポーツ教育に力を入れた学校であった、といえる。

2. 嘉納治五郎によるオリンピック運動の受容

オリンピック競技大会の組織委員会からの、日本への働きかけはすでに、1906年にアテネで行われた中間オリンピック競技大会の際にな

されていた。ギリシャの委員、クリサフィスから、1905年に日本体育会監事山根宛に、日本人をオリンピックに参加させるための委員会を設立してほしい旨の依頼状が届いた。日本体育会体操学校は、国民体育振興を旨としてつくられた機関であったが、オリンピック競技大会への参加について議論した結果、経済的な面と、エリート選手の養成はしない、という理由で拒絶してしまふのであった。

次のオリンピックとのかかわりは1909年のことであった。クーベルタンの意を受けて駐日フランス大使ジェラルドが、1912年のオリンピックへの参加と日本のオリンピック委員会の設置を、東京高等師範学校長であった嘉納治五郎に要請したのであった。嘉納は彼自身が、競争性と精神性を合わせ持つ体育に関心を寄せていたためであると思われる。

競争性について、嘉納は次のように述べている。「若い者を懦弱にせず、不活発に流れしめず元気に生活させようと思うには体育に限るのであり、彼らが体育に興味を持たせるには競争心を持たせるものがよい、オリンピックで行われるものが、最も理想的であるとは限らないが、ともかくはやらせたほうがよからう（嘉納治五郎大系 p.356）。」

競争心を持たせて、体育を奨励する、これは東京高等師範学校で、嘉納が学生達にすでに実施していたことであった。これは日本体育会と対比的である。日本体育会は、エリートの養成にはふさわしくない、と考えて1906年のオリンピック参加要請を断ったのであるが、嘉納は、国民体育の振興に役立つという点で、積極的に関わっていったのであった。

嘉納は柔術から柔道を考案した際にも、競争性を重視した。東京高等師範学校長として、体育を奨励したが、その際に、水上競技大会や長距離走大会などを取り入れて行うなど、競争性を重視した。競争性を取り入れることで、体操と違って、若者が体育に興味をもって取組むことができると考えていた。さらに、競争を公開で行うことは、それぞれの所属する流派や学校という単位を超えて交流することが可能になり、このことは武術など、閉鎖的な体質をもった運動集団とは別の、新たな日本的スポーツを形成するという、彼本来の考えが底流にあった

のである。

また、嘉納は柔道にみられるように、その実践を通して、勇気、忍耐、礼儀、相互扶助の精神など、技術の向上のみならず、精神的な面においても、向上させることができると信じていた。東京高等師範学校においても、游泳実習では、同様の精神的な面での錬磨が再三強調されている。

嘉納は、オリンピックを受け入れた理由として、「古代オリンピックがギリシャ民族の精神性を築いたように、世界各国国民の思想感情を融和し、世界の文明と平和を助くる（嘉納治五郎大系 p.293）」、「勝敗を超越して、相互に交流を深めて、相互の親善関係を深める」などと述べているが、スポーツにより身体と人格が磨かれ、それが社会に及ぼす影響ということについて、自身の実践を通して考えていたのであった。

嘉納は柔道や学生スポーツを体系化する中で、競争性を取り入れて行くことの意味、またそれらを通して精神面の修養、すなわち、スポーツによる人格の形成ということを考えて実践していた。そのために、オリンピック競技大会やその精神性について説明された時に、彼はその意味も理解でき、むしろ積極的に参加すべきであると、承諾できたと解される。

ただし嘉納は、IOCの要請にそのまま応じて日本オリンピック委員会をつくるのではなく、大日本体育協会を設置した。これは、嘉納の国民体育の発展という考えを強く持っていたからである。この点は日本的な受容というべきもので、あくまでも国民レベルで体育・スポーツを奨励し、普及させるというねらいをもって、オリンピック運動に参加しようとしたのであった。

3. オリンピック選手を輩出した東京高等師範学校

嘉納校長による体育・スポーツ奨励の雰囲気の中から、東京高等師範学校は多くのオリンピック選手を輩出した。第5回オリンピック（ストックホルム、1912年）にはマラソンの金栗四三が、初の日本代表選手の一人として選ばれた。彼は、世界最高記録を国内予選で樹立して、活躍が期待されていたが、問題はストック

ホルムまでの旅費であった。この点を解決したのは、「金栗四三選手後援会」の結成であった。これは東京高等師範学校の教職員、OB、在校生、その他有志で構成され、寄付金を募ったところ、多くの者が賛助した。後援会賛助会員可児徳は、「此挙は我邦が世界の運動場裡に仲間入りをした、第一歩であるとして、大いに喜んでよい。のみならず、其成績如何は暫くおき、此挙が、我邦今後の體育に、大なる影響を興ふるものであることを特に喜ぶのである。」と祝辞を送っている。嘉納校長は「君の最善を尽せよ、最善を尽したる上の勝敗は男子の本懐なり」と激励した。後援会に寄せられた寄付金は、総額で二千円を超え、ストックホルムへの旅費、滞在費、練習費、食事代、ユニフォーム代等に当てられた。

つまり東京高等師範学校は、初の日本代表選手を、経済的な面まで面倒を見た上で、送り出したのであった。このような点からも、東京高等師範学校により、日本のオリンピックへの参加の道が開かれたといえる。

金栗は、1912年のオリンピックは、熱中症のため、途中棄権してしまうが、欧米人の科学的な練習法を日本にも取り入れねばならないこと、また国民全体に体育をさらに奨励すべきこと、日本食の確保が大事なこと、などについて、報告書に記載しており、彼の経験は、後続のオリンピック選手に大いに役に立ったのであった。

第7回と第8回のオリンピックにも、マラソン選手として参加した金栗は、マラソンの底辺を拡大させるために、東京、箱根間をリレー方式で走る、箱根駅伝（現在の東京箱根間大学駅伝）を東京高等師範学校教授の野口源三郎、明治大学の長距離選手沢田良一らと企画し、第一回を1920年2月に開催し、東京高師・明治・早稲田・慶応の4校が参加した。彼はアメリカ大陸を走って横断する計画も考えていたといわれる。アントワープ大会以後、府立女子師範学校に勤めて、女性の体育を奨励する一方、日本陸上競技連盟会長、そして戦後は熊本県教育委員会委員長などを歴任し、日本における体育の普及に努めた。山田敬蔵を1953年にボストンマラソンで優勝させた。

金栗を含めて、第7回オリンピック（アント

ワープ、1920年）と第8回オリンピック（パリ、1924年）には、それぞれ5名の東京高等師範関係者が出場した。国際大会に出場した彼らは、後に体育・スポーツの指導・研究者としても活躍した。金栗はもちろんのこと、野口源三郎（陸上）、岡部平太（柔道）、宮畑虎彦（水泳）ほか、多くの人材が日本におけるスポーツの普及とスポーツ研究の促進に貢献したのであった。そのような道を開いたのが、嘉納校長に代表される東京高等師範学校であったといえよう。

「映像データベース「筑波大学とオリンピック」」の内容

東京高等師範学校から筑波大学・体育にいたるまで、日本のオリンピック初参加以来、今日まで一貫してオリンピックに関わってきたことを示すために、映像データベースを作成した。

東京高等師範学校時代から、2000年秋に行われたシドニー・オリンピックまでの大会において、活躍した関係者をこれまでの関連の映像から抽出し、「筑波大学とオリンピック」というテーマで編集した。

映像の内容は以下のものがおさめられている。

1. 日本のオリンピックへの参加

1909年駐日フランス大使より、当時の東京高等師範学校校長 嘉納治五郎に国際オリンピック委員会委員への就任を、求められた。嘉納は、オリンピックはスポーツを通じて、諸外国との友好促進に資すると判断して受諾し、日本人初のIOC（国際オリンピック委員会）委員に就任した。翌年、第5回大会（ストックホルム）に日本も出場するようにとの要請があり、選出の母胎となる大日本体育協会を設立し、選手の選考に臨んだ。嘉納の決断から、日本のオリンピック運動が始まったといえる。

2. 日本人初のオリンピック選手（金栗四三 1912年）

最初のオリンピック選手に選ばれた二人のうち一人は、東京高等師範学校の学生、金栗四三（熊本県出身、東京高等師範学校、地歴科学生）であった。彼は国内の選考会で世界最高記録を樹立したので、期待されたが、レース日の暑さのため、途中棄権してしまう。しかし彼は、マラソン選手として第5回オリンピック（ストックホルム）のみならず、第7回オリンピック（ア

ントワープ)と第8回オリンピック(パリ)にも出場するなど、たいへんな実力と気力の持ち主であった。また選手引退後は指導者として、ポストンマラソンに優勝する山田敬蔵はじめ、多くのマラソン選手を育てた。彼は生涯で25万キロも走破し、89歳で永眠した。

3. 野口源三郎、吉岡隆徳(1920/1932年)

東京高等師範学校からは、アントワープとパリで開催された第7回および第8回オリンピックにおいて、日本選手団の主将や監督を務めた野口源三郎、1932年にロサンゼルスで開催された第9回オリンピックの100m走で、6位に入賞して「暁の超特急」と呼ばれた吉岡隆徳(たかよし)などを輩出した。野口は後に学校体育や陸上競技の向上に尽力する一方、東京教育大学体育学部長も務めた。初期のオリンピックには、東京高等師範学校の関係者が多くオリンピック選手として活躍した。

4. 東京オリンピックでの活躍(小野喬、遠藤幸雄、猪熊功 1964年)

1964年に行われた第18回オリンピック(東京)では、東京教育大の関係者が選手として大活躍した。日本選手団の主将として小野喬が開会式で選手宣誓した。彼は、体操で「小野に鉄棒」といわれる程の演技で、金メダルを獲得した。小野喬は日本のオリンピック選手の中では、最も多くメダルを獲得したアスリートである。遠藤幸雄も同様に体操で活躍し、金メダルを獲得した。柔道(重量級)でも、東京教育大学体育学部出身の猪熊功が金メダルを獲得した。体操女子では小野清子が健闘し、団体総合で銅メダルを獲得した。

5. 体操黄金期。(加藤澤男 1968年)

東京オリンピック以降、東京教育大学体育学部生加藤澤男(現在 本学教授)が体操において圧倒的な強さを見せ、小野、遠藤に続く日本体操界の黄金期を築いた。第19回オリンピック(メキシコ)では個人種目最後の床運動の演技で9.90を出して、個人総合で逆転優勝を果たした。加藤はこの大会で金メダル3個(団体総合、個人総合、床)、銅メダル1個(つり輪)を獲得した。

6. 体操黄金期(加藤澤男 1972年)

第20回オリンピック(ミュンヘン1972年)でも、東京教育大学の大学院生加藤澤男の活躍

により、日本男子は団体総合4連覇を決めた(映像は加藤の床の演技)。加藤はこの大会で金メダル3個(団体総合、個人総合、平行棒)、銀メダル2個(鉄棒、あん馬)を獲得した。

7. 体操黄金期(加藤澤男 1976年)

第21回オリンピック(モントリオール1976年)では、日本男子は、オリンピック団体総合5連覇を決めた。加藤澤男(当時 筑波大学助手)は、この大会で金メダル2個(団体総合、平行棒)、銀メダル1個(個人総合)を獲得した。個人で金メダル8個という記録は、日本人のオリンピック選手で最も多い記録になっています。1999年には国際スポーツ記者協会から「The Best Athletes of the Century」20人の一人に選ばれた。

8. シンクロ初メダル(元好三和子 1984年)

第23回オリンピック(ロサンゼルス)では、シンクロナイズドスイミングで、筑波大学大学院生(体育研究科)の元好三和子(現在 本間助教授)が、デュエットで日本初のメダルを獲得し、今日のシンクロ発展の基礎を築いた。なお本間助教授は、シドニーオリンピックでもシンクロチームのチームリーダーとして活躍し、日本チームをシンクロ史上初の銀メダルに導いた。

9. オリンピックで活躍した筑波大生・OB。

(三屋裕子、廣 紀江 1984年)

ロサンゼルス・オリンピック(1984年)のバレーボール女子では、三屋裕子(現在 本学非常勤講師)や、廣 紀江(当時 体育専門学群生)の活躍により、強豪ペルーを破り、銅メダルを獲得した。

10. オリンピックで活躍した筑波大生・OB「

(柔道 岡田弘隆 1992年ほか)

柔道では、第25回オリンピック(バルセロナ)と第26回オリンピック(アトランタ)で、多くの筑波大生・OBがメダルを獲得した。映像に登場するアスリートは以下の通りである。

柔道男子

岡田弘隆 (86Kg級 銅メダル 当時体育研究科大学院生 現在本学講師)

柔道女子

坂上洋子 (72Kg級 銅メダル 1992年)

立野千代里 (56Kg級 銅メダル 1992年当

時体育専門学群生)

- 田辺陽子 (72Kg級 銀メダル 1996年
体育研究科大学院生)
菅原教子 (52Kg級 銅メダル 1996年)

11. シドニー・オリンピック参加選手壮行会

2000年に開催された第27回オリンピック(シドニー)には、現役の学生2名(柔道、競泳)をはじめ、卒業生合わせて13人が出場、パラリンピックには1名(走り高跳び)が出場した。

12. シドニー・オリンピックで活躍した筑波大生・OB。(柔道 榑崎教子 2000年)

優勝候補にあげられていた榑崎教子(ダイコロ所属、旧姓菅原)は決勝で惜しくも敗れてしまうが、堂々の準優勝を果たし、二大会連続でメダルを獲得した。

13. シドニー・オリンピックで活躍した筑波大生・OB(競泳 大西順子 2000年)

筑波大学出身の大西順子(当時ミキハウス所属)が競泳、女子400mメドレーリレーの第3泳者(バタフライ)として出場した。女子競泳陣の中で最年長ではあったが、大西の頑張りで4位に差をつけて第4泳者に引き継ぎし、女子競泳陣初の、リレー種目でのメダル(銅)を獲得できた。大西は100mバタフライの個人種目でも6位入賞を果たした。

14. シドニー・オリンピックを支えたスタッフ

筑波大学では、多くの教官がオリンピック運動にかかわっており、監督、ティームドクター、コーチなどのスタッフとして参加し、日本選手の活躍を様々な面から支えた。

このように筑波大学は、過去から現在に至るまで、日本のオリンピック運動に貢献してきた。これからも研究も含めて様々な観点からオリンピックやスポーツの発展に尽くしていくものと思われる。

映像データベース等の活用

この映像データベースは、体育・芸術専門学群棟4階の体育・スポーツ史料室に所蔵され、誰でも鑑賞することができる。平成14年度、15年度のフレッシュマン・セミナーを通して、1年生のほぼ全員が鑑賞した。また、「オリンピック史(体育専門学群4年生対象1単位)」の授業でも、活用

されている。体育・スポーツ史料室の見学を訪れた人にも、映像を流して鑑賞できるようにしている。夏休みには、多くの小学生も体育・スポーツ史料室の見学を訪れた際に、映像も鑑賞している。

映像の出典

- NHKビデオ「オリンピック栄光の記録1」1976年
NHKビデオ「オリンピック栄光の記録2」1976年
NHKビデオ「オリンピック栄光の記録3」1976年
NHKビデオ「オリンピック栄光の記録4」1976年
NHKビデオ「ロサンゼルス・オリンピック総集編」1984年
日本テレビ番組「知ってるつもり?!」1991年
NHK(ハイビジョン)番組「シドニー・オリンピック」2001年
埼玉県広報番組「ふるさとに拾う『体育に生涯をかけて～野口源三郎』」1983年
国際柔道連盟編「Olympic Judo Barcelona 1992」1992年
国際柔道連盟編「アトランタ・オリンピック柔道 1996」1996年
国際柔道連盟編「2000シドニー・オリンピックゲームズ 柔道」2000年

参考文献

- 1) 金栗四三, 小学校に於ける競技と其の指導法, 南光堂出版, 1924年.
- 2) 講道館監修, 嘉納治五郎大系第八卷, 1988年.
- 3) 茗水百年史編纂委員会編, 茗水百年史, 茗水会, 2002年.
- 4) 日本体育会日本体育大学八十年史編纂委員会編, 日本体育会日本体育大学八十年史, 日本体育会 1973年.
- 5) 東京高等師範学校校友会編, 校友会発展史, 1911年.
- 6) 東京高等師範学校・東京文理科大学, 創立六十年, 東京文理科大学, 1931年.
- 7) 東京高等師範学校 校友会誌第三二号 1912年.
- 8) 東京高等師範学校校友会游泳部編, 游泳術教範, 1913年.
- 9) The Swedish Olympic Committee, The official report of the Olympic Games of Stockholm 1912. Stockholm : Wahlstroem & Widstrand, 1912.